



所管事務調査報告書（伊豆中学校）

10月21日伊豆中学校に伺い、教育厚生委員会として所管事務調査を実施いたしました。前もって質問事項を提出しました。

教育長、教育部長、教育課長、校長、教頭が対応していただきました。議会側（教育厚生委員会議員7名＋委員外議員1名）計8名にて限られた時間内（一時間午前10時～11時）にて実施したものです。質問および回答については、フォルダ3、教育厚生委員会>R7年>10,21に掲載させていただいております、参照いただきたく報告書には詳細は明記いたしません。

委員長挨拶をいたしました。9月の本会議において議員より、「開校に際して教育長以下関係各位には特に令和6年度一年間は大変なご尽力をいただき、心よりの敬意を表します。」、旨の発言があり他の議員も同感の思いである旨も付け加えお伝えしました。最初の30分間は質問に対する回答をお願いし、15分間にて質問事項の回答に対する補足質問の質疑、最後の15分間にてその他の質疑の割り振りとしてさせていただくことに、させていただきます。との挨拶をさせていただきました。質問（1～7）については教頭より真摯に回答いただきました。伊豆中学校回答にて確認いただけます。また補足質問に対しても伊豆中学校回答の中に網羅されています。

開校より約半年が過ぎた、現状は大事もなく順調なすべり出しとなっている印象であると感じられた調査結果です。来校者からも絶賛される施設であり基本的には快適な環境となっております。との学校側より報告された。

評価は及第点であり、順調な船出に見える。が一方で評価の高い絶賛される施設でも、無機質な温かみを感じられない施設との評価もある事を参考事例として学校側に伝えさせていただきました。パーフェクト満点はなかなかない事、謙虚に真摯に評価を受け止め良い学校になっていただきたい、出発まじかでもありバタバタしていることも承知しているが、将来の夢、希望、思いが重ねられたらいいなと思いました。つまり将来像を描きながら生徒、先生、父兄、関係者がビジョンを構築するため一丸となり慢心努力を願います。

♪ピカピカの一年生♪!! ですから。

教育厚生委員会

鈴木優治



令和7年度所管事務調査 報告書

202510.21(火)10:00~11:00

伊豆中学校にて

黒須 淳美

開校から半年が過ぎた伊豆中学校の運営について、現地を訪問し所管事務調査を行いました。

事前に提出した質問事項についての答弁や質疑、その後に校内を見学し生徒の様子や校内の状況などを確認しました。

(1) 質問事項とその回答

1. 生徒について

・3中学校を統合したことで、新しい学校への馴染み具合や生徒同士の交流など先ず生徒の様子が気になるところだが、学校からの説明では統合までの期間に小学校、中学校間での交流活動をしてお互いを知る場を設けてきたこと、また入学後は学年行事を6月に配置することで、その後は出身を越えて仲間づくりが進む様子が伺え、現在は学校祭に向けて一丸となって取り組んでいる、とのことだった。

・充実した ICT 教育環境では、壁面やホワイトボード、端末とモニターを活用しての学習活動が展開され、授業以外でも部活動や委員会活動のミーティングなどでも ICT 機器が活用されている。

・不登校生徒は現在15名あり、そのうち5名がほぼ来られない状況にある。5名うち4名は市学習支援教室を利用し、午後学校へ来ることもあるという状況。

・校内学習支援センターに準じた運用、という形になるが学習室を使い学習支援教室として対応している。こちらには1日の延べ5名程度が利用し、心の教室相談員2名が就いているとのことだった。タブレットで教室とつながり学習したり本を読んだりなどしている。

◆充実した最先端の教育・学習環境の中、全国的に増えている不登校生徒などへの学習や生活面への支援の充実についてどの生徒にも経験できるよう喫緊の課題として考えていきたい。

2. 通学について

・バスの時刻について、学校の行事など(午前日課、長期休業中の部活動)に丁度いい時刻のバスがないので不便という声を聞いている。

・マナーについては、車内で高齢者に席を譲らない、スマホの使い方などの指摘が地域からある。

- ・利用状況は、通学バスを部活動や塾、友人宅への移動など当初想定した使い方
でよく使われている。
- ・遠距離通学については、やはり時間的、体力的そして精神的な負担をかけてい
ると感じる。これについては下校後の居場所を整備することで負担を減らすよ
う考えているとのことだった。
- ◆バスの運用についてスクールバスも補助的に考えなければとの話もあったが
是非遠距離通学者などの負担、保護者の送迎なども含めた検討をしてもらえ
たらと思う。

3. 部活動について

- ・現在部活動は15あり、顧問2名の体制で維持できている。バレーや陸上など
初年度から成果が出ている部活動もあるが、今後は生徒数の減少が見込まれ
るので部活動の数も含め現体制の維持が困難である。
- ・野球部と陸上部は土肥小中一貫校生徒が参加、剣道部はR8年夏に廃部が決
まっている。
- ◆部活動は今後地域展開などが選択肢となるので、学校だけの問題ではなく地
域との連携など深めていく必要を感じた。

4. 伊豆中カフェについて

- ・現在は放課後の生徒居場所としてのみの活用。市支援員の勤務時間を調整し
て運用している。このスペースを地域に開かれた場所として利用するには管理
や専任の職員も必要となる。
- ◆地域の住民にも開かれた学校としてどのようなやり方が学校側、地域側にと
って無理なく利用できるかについて地域住民を巻き込んだ話し合いの場を作
るのも一つの方法ではと思った。

5. 校舎・教室について

- ・基本的には快適な環境となっている。
- ・強風時には窓を開けられないこともあり砂防が課題。
- ・施設の不具合はその都度担当部局が対応している。
- ◆開校当時には、校舎の作りによる使いにくさなどをよく耳にしたので半年経
過した今の状態が気になっていたが、使いながら工夫するなどしている状況を
確認できた。

(2) 校内の見学について

見学は丁度授業中だったので各クラスを見させていただいた。教室は窓が大きい

く廊下から中の様子がよく見えるが、引き戸を開けはなっている教室も多くあり開放的な印象を受けた。ICT 機器を使った授業は、生徒同士で話し合ったりして一斉に全員が前を向いて先生の話聞く、というひと昔前の景色は見られず能動的な学びを実践していると感じた。

教室の間に設置されている色とりどりのイスやテーブル、一階のメディアセンターなどを使っている様子が見られなかったのは残念だったが生徒たちの自由な発想で使いこなしてほしいと思った。



教育厚生委員会 伊豆中学校所管事務調査 報告書

2 番 飯田 大

令和 7 年 10 月 30 日

実施日時	令和 7 年 10 月 21 日 (火) 9:30~11:30
参加者	教育厚生委員 7名、尾垣議員、議会事務局長
用務先	伊豆市立伊豆中学校 会議室
対応者 (研修先講師)	伊豆中学校校長 教頭
目的・内容	《目的》 伊豆中学校開校後の状況調査 《内容》 1, 生徒 2, 通学 3, 部活動 4, いずカフェ 5, 校舎・教室 6, 教員 7, その他 8, 施設視察
成果・感想	《成果》 1、生徒について (1) 生徒間の出身を超えて仲間づくりが進んでいる。 (2) 各フロア一共に整備された機能を使い学習、部活動等に活用されている。 (3) 校内教育支援センターに心の教室相談員2名が配置され利用されている。 (4) 3中学校での勉強の進度の違いはない。 (5) 不登校生徒数、状況、対応についての報告では学校にほぼ来られない生徒は5名うち4名は市学習支援教室に通っている。 2、通学について (1) 保護者からの意見として下校時のバスがない、乗車拒否が見られた。等の意見があった。 (2) 通学バスは部活動、塾。友人宅への移動として利用されている。 3、部活動について各部活動の指導体制と中体連等の成績と今後の

部活動の活動方法の在り方等の報告がなされた。

- 4、いずカフェについて・放課後の生徒の居場所として活用されている。市民間の地域交流は実現されていない。
- 5、校舎・教室について(1)視察等来校者から絶賛されている。
(2)温度、騒音防止は保たれている。防砂は課題です。
- 6、教員について:時間外勤務は平均55～60時間
- 7、その他:事故や事件は発生していない。

《感想》

開校後の学校運営は想定を超える状況だったと察します。生徒、教員共に統合の環境の変化、ICT機器等、設備機器を使用した授業や部活動指導等にご苦労されたこと存じます。

夏休みを挟み半年経過した時点での報告を受けました。

生徒はPC・タブレットなどのICT機器を活用した教育をマスターし統合によるプレッシャーもなく学校生活を過ごしていることが分かりました。

通学については下校時のバスに不便があるとのこと、地域公共交通会議で今後の方向性が占めされることでしょう。

校舎や教室等学習環境への問題はなく、部活動は今後、部員、指導者等の状況に応じた対応が求められます。教師の時間外勤務の多さから教育指導の難しさが分かりました。

以上



伊豆中学校所管事務調査結果について

- ・ 開校してから半年経過した現在、建物の使い勝手には慣れてきた様子が伺える。
- ・ 何もかも揃った立派な校舎を、これから生徒たちとともに上手に利用して行ってほしい。
- ・ 内覧会の時とは違い教室で学んでいる生徒の姿を見て学校らしさを感じた。
- ・ 不登校生が452名中15名いるとのことだが、全国的に見て多いのか少ないのか分からないが、少しずつ少しずつ、教室に入れるよう気長に生徒に接する先生たちの努力は大変なものだと思う。
- ・ 勉強、クラブ活動、友人関係、通学問題等生徒の声を聞きたかった。

小川多美子



令和7年10月30日
教育厚生委員会 下山祥二

教育厚生委員会 所管事務調査報告書

【伊豆中学校】

「通いたくなる、通わせたい学校を目指して」をスローガンに、令和7年4月に開校した伊豆中学校の現況について、教育長・教育部長の同席のもと校長・教頭先生より事前質問項目をもとに所管事務調査を実施した。

1 生徒について

生徒同士の交流や馴染み具合が心配だったが、学校側としては出身中学校の垣根を越えた仲間づくりが進んでおり、さらに学校祭に向けて一丸となって邁進しているとのことだった。またICT機器の積極的な活用も図られ、探究活動が展開され学力の向上もみられていると聞き、順調なスタートを切っていると安心しました。

不登校生徒数についても新たに新中学校に通うという環境の変化がきっかけとなったのか、前年度からは半減しているという回答だった。今後とも学校、保護者、地域が連携して温かく見守っていくべき重要な課題であると考えています。

2 通学について

新中学校の開校前から保護者の一番の関心事だった通学については、開校から半年経ち課題が顕在化してきた。特に登下校時の通学バスについては、現状の課題を把握しつつ当事者の生徒、保護者、学校、地域、交通事業者と改善に向けた取組みの必要性を感じた。

3 部活動について

早々に成果がでていく部活もありうれしく思いますが、将来的には生徒数の減少が見込まれる中、年々現体制の維持は困難になっていくことは明白である。部活動を通じた人間形成も貴重な体験であり、今後は地域完全移行の検討も必要であると考えます。

4 いず中カフェについて

現状ではあまり活用されていない状況。早々にルール化して生徒と地域の方々との交流を通して、地域住民の身近な居場所として活用され、地域からも愛される「伊豆中」となるように期待しています。

5 校舎・教室について

やはり校舎は強風時に窓を開けることが出来ず、南向きの配置により夏の間の酷暑に耐えるための温度管理は電気代や体育館のガスエアコンのガス代が嵩んでいることを確認した。「先進的な校舎だけではなく、中身を褒めてもらうように努力したい」という校長先生のお話には全面的に賛同いたします。

6 教員について

今後とも多くの先生が伊豆中学校への赴任を希望する学校運営に期待しています。

以上



令和7年10月8日

教育厚生委員会所管事務調査報告書

伊豆市議会 教育厚生委員会 青木 靖

1. 調査日 令和7年10月21日 火曜日
2. 調査対象 伊豆市立伊豆中学校
3. 調査項目 「本年度開校した伊豆中学校の現状」
4. 実施結果報告

○事前質問事項に対する回答を通じて

- ・修善寺、中伊豆、天城の三つの中学校、さらに、修善寺南、修善寺東、修善寺、熊坂、中伊豆、天城の六つの小学校から集まった生徒が一堂に会する新しい学校としてスタートした伊豆中学校。6月の学年行事以降、現在は学校祭（楓流祭）の準備を通じて、旧中学校や小学校の出身を超えた仲間づくりが進むようすが伺えるとのこと。
- ・1階にある広く開放的な空間に配置されたラーニングスペースやマルチメディアルームなどの活用状況としては、放課後時間に行われている探求活動等で、プロジェクターから壁面に投影する機能や移動式のホワイトボードが有効に機能しており、小集団での学習や生徒間でのプレゼンテーションを通じ発信力の向上にも繋がっている様子。
全国学習調査からもパソコンやタブレット等の活用が定着している結果が出ている。
- ・不登校の生徒の現状については、昨年までの旧3中学校の合計より減少しており、新中学校に移行したことをきっかけにして登校できるようになった生徒がいることがわかった、とのこと。学習室での支援を通じて、教室に通えない生徒への対応が出来ていると感じた。
- ・新中学校での最大の懸念事項であった通学問題については、今後も実態を把握した上で対応していく必要があると感じた。
バス通学については、朝の登校時、そもそもバスに乗り切れない現象が発生していた（小学生が乗り、観光客が乗ると、中学生は乗り切れない）。バスのやりくりで対処するしかないが、バス事業者側としては運転手不足から対応が難しいとのこと。引き続き具体的な解決策を検討する必要がある。
又、中学生フリーパスを発行したことで、生徒のバスでの移動が増えているが、下校時や移動先からの帰りにバスが無いことが多く、結局、家族が車で迎えに行くことになり、家族の負担が増える要素のなっていることも、保護者から指摘されている。

・バス通学を前提にした場合、バス停まで遠い生徒も存在しており、男子生徒は自転車という選択肢があるものの安全管理は自己責任になるし、女子生徒はやはり家族の車での送迎が必須の状況かと思われる。そうした現状を踏まえて、登下校の状況を継続的に注視して対応するべきと考えます。

小学校、中学校、高校と段々遠くまで通学する必要があるのは避けられない事実ではあり、その過程でたくましく育ってほしいとの願いと同時に配慮の必要性も感じる。

・部活動については、そもそも部の存続が問題となっている。生徒数の減少と部活動以外の活動、学習塾や習い事、クラブチームでの活動など、学校以外の場所で放課後を過ごす生徒が多いのが現状であって、部活動への期待値が下がっていると感じる。部活動に入っていない生徒も60名程度いるとのこと。教師の働き方の観点からも、従来の部活動のあり方からは違う方向に進んでいると感じる。生徒の放課後の過ごし方、として考えていくことが必要かと考えます。

・伊豆中学校の校舎は広く、校庭というか周辺の植栽などの管理も先生方だけでは手が行き届かないのではないかと感じます。今後、地域とのつながりを模索していく段階に入るとは思いますが、幅広く多くの方々に関わってもらえるような取り組みにしていく方がよいと思います。

○まとめとして

現在の中学校の学習の現場では、ICTの活用と同時に、アナログの良いところを再発見して、双方を混ぜることで、より効果的な学習に努めている、との印象を受けました。

ICTの進歩、とりわけAI機能の進化によって、中学生の学習のあり方も影響を受けることになっていく、と考えます。単に覚えるとか暗記する、という勉強は必要なくなりつつあるといえます。

AIを利用することで学習だけでなく仕事も変化しようとしている現在において、必要にして重要な能力は「言語化力」であると言われ始めました。AIに使われる人になるのかAIを使いこなす側の人になるのかが、ひとつの分かれ道になる、ということを踏まえた教育が公教育でも求められていくと思います。

インターネット環境の整備が進み、今後は東京のような都市に集中する時代から地方で働くことが効率的で生産的であるといわれて暫く経過しました。本格的な地方の時代が来るのも遠くないかもしれません。

伊豆中学校の生徒には、人として社会で生きてく上で必要な能力を中学校の3年間で少しでも多く身に着けるてほしい。高いコミュニケーション能力や多言語対応能力も兼ね備えて、伊豆市に軸足を置いて、「Think Globally, Act Locally」で、世界で活躍する人になってほしいです。

素晴らしい自然環境の中で、素晴らしい校舎を得た伊豆中学校の生徒と先生方に期待します。

以上



木村建一

開校から半年、生徒たちの様子

新中学校が開校して半年が経過したが生徒たちはどうか。「文化と体育の学校祭の様子で生徒たちは充実しているなど感じる」との説明があった。体育の学校祭をしたが、学校がいう『充実』を実感した。

ICT 環境

構内見学をして、認識を新たにした。

「ICT（情報通信技術）環境が整備されていること。単に生徒に一人端末だけではない」こと。また ICT を導入しているが、「アナログも大いに活用している」。図書メディアにホワイトボードがあったが単なる図書棚の区切りではなく「ここで授業などをするとき、黒板がわりに活用している」との説明を受けた。

教育支援センター・不登校

学校にほとんど登校できない。登校しても、教室には行けない、短時間で帰宅する…など様々。校長先生が「学校には来るが、すぐに帰る子—登校扱いにしてもいいのではないだろうか」と一律ではない、その子に合った柔軟な対応に“個人の尊厳”を大切にしている伊豆中学校教育の暖かさを感じた。

ほとんどの市民はかかわっていない。私もその中の一人だが支援センターの心の相談員やスクールソーシャルワーカーが学校で子どもたちに寄り添っているとのこと。不登校ゼロの伊豆中学校を望む。

文部科学省の「不登校生徒の出席扱いに関する要件の一つに ICT 等を活用した学習」をあげていた。伊豆中は最適な学習環境として ICT の活用を。

部活動

少子化で部活動の範囲が広域になる恐れがあることをうかがった。学校教育に部活動はどうあるべきか。先輩後輩という人間関係、部活動を通じての人と人とのふれあいの大切さをどうするのかなど考えさせられる。

教師の勤務時間

経済協力開発機構（OECD）が10月に教職員の仕事を発表した世界最長。伊豆中の教師も例外ではないなど考える。「教職員の労働条件は、子どもの教育条件」。先生は子どもを愛しています。多少の犠牲を苦にしません。適切な労働時間とともに自分で判断して仕事をすすめる自由が必要。自由こそ先生と子どもが心を通わせることができる。そんな学校に少しずつでもいいから進められたらいいなど思っています。